病状の進行について

パーキンソン病には、病気自体の進行を停止したり遅くしたりするというようなはっきり証明された薬剤は今のところありません。残念ながら病状は数年単位でゆっくりと進行します。しかし、病期の進行速度には個人差がかなりあります。

重要なことは、パーキンソン病という診断に誤りがなければ、4－5 年で車椅子生活を強いられるような状態に陥ることは絶対にないことです。発症から 10 年以上たっても登山されている患者さんもめずらしくありません。

パーキンソン病に有効な薬（抗パーキンソン病薬）は十数種類もあり、それをどのように使い分けるのかは非常に大事です。

また、別述の脳深部刺激療法（DBS）という脳外科的な手術療法も普及しており、その手術適応を神経内科医が適切に判断し、信頼できる機能的定位脳外科専門医に依頼し手術を受けることによって、症状が劇的によくなることも少なくありません。

日々の運動療法・エクササイズを自分で継続なさることも大事です。

この他にも神経内科と他科との連携によって初めて可能となる重要な治療法がいくつかあり、それらの治療法を適宜選択すれば症状をうまくコントロールすることが可能です。

パーキンソン病は、体が固くなるとか、動きにくいといった「運動障害」だけではなく、うつ状態になりやすいなどの「精神症状」や便秘がひどい、立ちくらみが生じやすいなどの「自律神経症状」なども生じてきます。

これらの問題が生じてきた際には、それぞれに適宜対応していくことが必要ですので、主治医に早めに相談することが大事です。短時間に多くの患者さんの診察をしなければならない日本の現状では、患者さんの方から医者に問いかけることも必要です。

パーキンソン病は新聞などのメディアでしばしば「難病」としてとりあげられます。しかし、原因が不明という意味ではまだパーキンソン病は「難病」かもしれませんが、治療面で言えば、たくさんの選択肢があり、決して「難病」とは言えない時代になっています。他の病気についても言えることではありますが、内にこもることなく積極的に前向きに生きていくことが、精神面、肉体面で病状の悪化を防ぐことができます。